

調査報告

宮城県山元町合戦原古墳群の測量調査

青山博樹・岩見和泰・鈴木朋子・田原由男・藤沢 敦

1. はじめに

合戦原古墳群は、集落跡・古墳群・横穴墓群・窯跡群からなる複合遺跡である合戦原遺跡内にあり、小円墳8基からなる古墳群として知られていた（志間 1956）。これまで数基の古墳が国道6号線の工事に伴って調査されており、ガラス小玉などの出土遺物が知られている（志間 前掲書）。

1990年には宮城県山元養護学校のグラウンド造成に伴って古墳群の南西約600mの地点で発掘調査が行われ、5世紀後葉から6世紀初頭の集落跡が検出された（岩見・佐藤 1991）。この時、調査員として発掘調査に携わった古川一明と岩見和泰は、遺跡周辺の踏査を行った際に本古墳群に前方後円墳が存在することを確認した。

亘理郡内の古墳については志間泰治によって研究が進められてきたが（志間 前掲書・1975）、これまで前方後円墳の存在は確認されておらず、前方後方墳を含めても亘理町の長井戸古墳（全長40m）1基が知られるのみであった。周辺の前方後円墳には、宮城県南部の沿岸地域では岩沼市かめ塚古墳、福島県北部の沿岸部では相馬市高松1号墳や鹿島町真野寺内20号墳・同24号墳などがあるが、これまで空白であった地域に前方後円墳が確認された意義は大きい。

前方後円墳を中心とした古墳の変遷により社会の変化を明らかにする研究の動きは、近藤義郎らを中心として全国的に進められており（近藤他 1994など）、東北地方の古墳については辻秀人や藤沢敦による取り組みがある（辻・藤沢 1994、藤沢 1995）。本古墳群において前方後円墳が確認されたことは亘理郡周辺の古墳時代社会を考えいく上で重要であり、古墳群の全体像を把握して公開することは地域における理解と保護を図る上でも有益であると考え、岩見と藤沢が中心となり、山元町教育委員会と国立療養所宮城病院、山元町歴史民俗資料館、地権者の方々のご協力を頂き、有志による測量調査を行った（註1）。測量調査は1996年4～5月、1997年4～5月の2カ年にわたって実施した。

本報告の執筆は、1・2を鈴木の作成した図をもとに岩見が、3(1)を藤沢、3(2)・(3)を青山、4を岩見・青山、5を青山が、図10の原図を田原が分担した。

2. 立地と周辺の古墳

(1) 立 地

合戦原古墳群は亘理郡山元町高瀬字合戦原に所在する。山元町は宮城県沿岸部の南端に位置し、北は亘理町、西は長泉寺古墳群や横倉古墳群などの古墳群が数多く点在する角田市、南西には台町古墳群のある丸森町、南は福島県と接している。本古墳群は山元町のほぼ中央、山元町役場から南東約2.4kmに位置し、国立療養所宮城病院北側の雑木林にある。

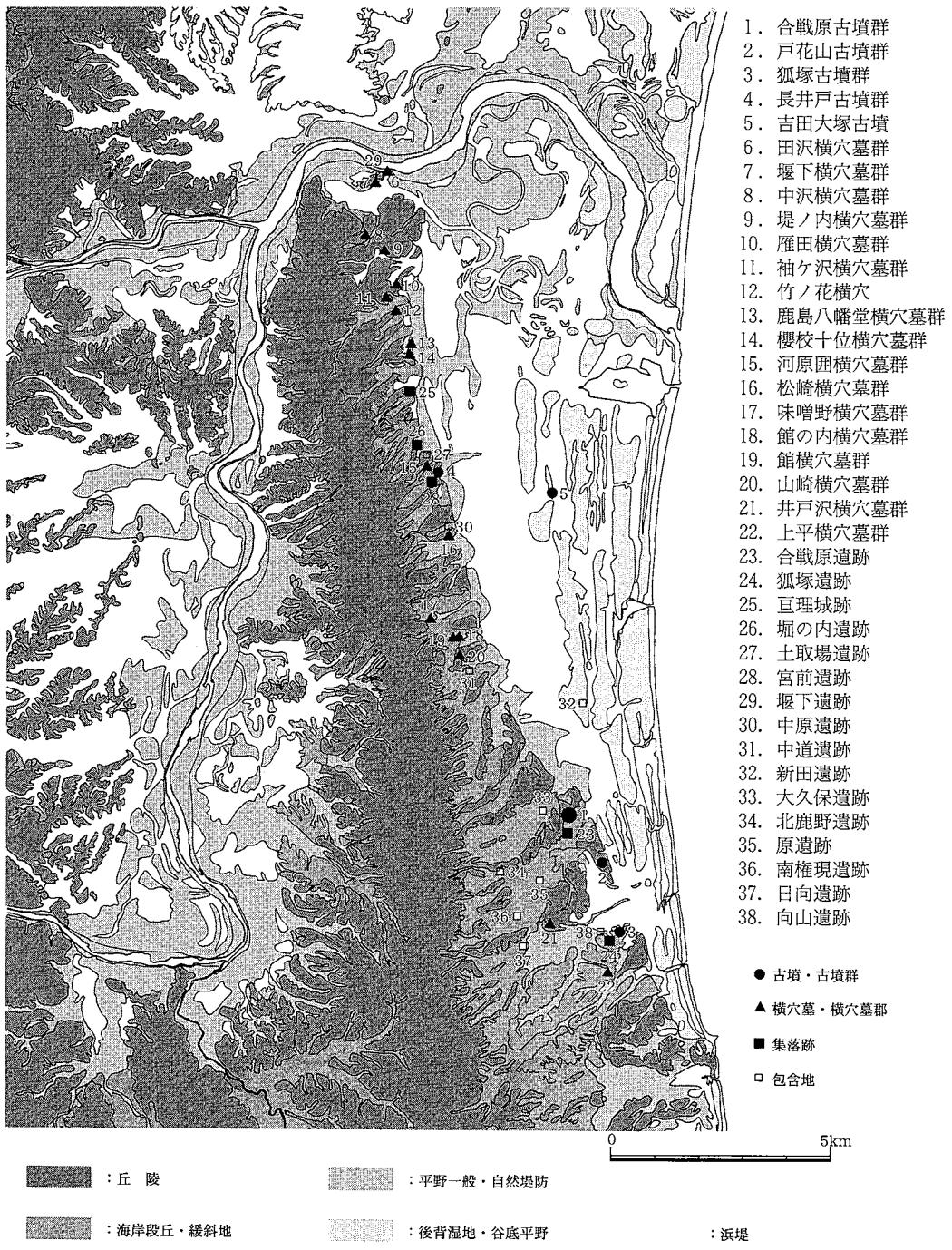
地形を概観すると、阿武隈山地の北東端部にあたる鹿狼山地が高度を減じながら幅狭く北へ伸びており、西には伊具盆地、東には海岸段丘が発達する亘理丘陵が樹枝状に分布し、沿岸部には仙台地域から連続する海岸平野の南端部にあたる吉田平野が広がる。吉田平野の海岸沿いには数条の浜堤があり、丘陵と浜堤の間は後背湿地となっている。丘陵は頂高が40～100mあるが、丘陵縁辺に形成された低位段丘は平野面に収斂して境界は不明瞭となっており、吉田平野は標高が10m以下である（中川他 1986）。

合戦原古墳群は、鹿狼山地から樹枝状に伸びる亘理丘陵が東へ張り出した端部に立地し、古墳は標高20mから37mの間に築かれている（図1・2）。

(2) 周辺の古墳

亘理郡内の古墳・古墳群は現在5遺跡知られている。長井戸古墳群は亘理町の南西に位置し、平野に接する低丘陵の東端に立地する。古墳時代前期と考えられる全長40mの前方後方墳1基と小規模の方墳1基・円墳4基が知られていたが、円墳2基は土取りにより失われている。吉田大塚古墳は直径33mの2段築成の円墳で、長井戸古墳群の東方約3kmの浜堤上に立地しており、亘理郡内で唯一埴輪が確認されている。採集されているのは窯窓焼成の円筒埴輪の破片で、特徴から築造年代は5世紀後半と考えられる。狐塚古墳は山元町の南部に位置し、海岸部に近い丘陵上に立地しており、直径10m以下の円墳3基が確認されている（志間 1956・1975）。戸花山古墳群は戸花山窓跡群として登録されている範囲内にあり、合戦原古墳群の南東約1kmの丘陵上に立地する。全長12～14mの前方後円墳1基と小規模の円墳5基以上からなり、全体像の解明は今後の課題である。

古墳時代の遺跡はこれら以外に、亘理町で集落7遺跡、横穴墓・横穴墓群11遺跡の計18遺跡、山元町では集落8遺跡、横穴墓群6遺跡の計14遺跡が知られている（第1図）。長井戸古墳群の西に隣接する宮前遺跡では発掘調査により古墳時代前期と中期の集落跡が確認されており（丹羽 1983）、北に位置する堀ノ内遺跡でも古墳時代前期の遺構が発掘調査で見つかっている（真山 1999）。また、合戦原古墳群の南西に近接する合戦原遺跡では古墳時代中期から後期にかけての集落跡が調査され、一辺が12mを超える大型住居跡などが確認されているほか（岩見・佐藤 1991）、狐塚古墳の北西に隣接する狐塚遺跡では古墳時代



中川久夫（1984・1986）文献より作成

第1図 亘理郡の古墳時代遺跡 ($S = 1/12500$)



第2図 合戦原古墳群周辺の古墳位置図 ($S = 1/10000$)

後期の住居跡などが発掘調査により確認されている(窪田 1995)。これらの遺跡は各古墳群との関連性が想定され、その築造年代を考える上で重要である。

3. 調査の方法

(1) 測量の方法

調査にあたっては、縮尺100分の1、25cmコンターで原図を作成し、基準点は国土座標上に位置付けることとした。古墳ごとに最低1点の基準点を設置するようにし、T4～T5…T13～T14～T15～T4という形で閉合トラバースを組み、これにT14～T1～T2～T3～T4という形で結合トラバースを組み合わせた。また、必要に応じて枝線を伸ばし、図3に示したようなトラバース網を形成した。閉合トラバースでの測角誤差は12角で50秒、距離誤差は側線長合計280.608mに対して0.9cmである。結合トラバースの測角誤差は5角で2秒、距離誤差は測線長合計91.176mに対して1.6cmである。いずれも必要な精度を保っていると判断し、誤差配分を行った。

国土座標の算出にあたっては、三等三角点「後藤淵」から四等三角点「合戦原」とT4-Bを視準し、両者間の交角と、T4-Bまでの距離を測定し、国土座標地を算出した。立木などのため、他に視準できる基準点が無かつたため、やむなく枝線の基準点を利用したものである。標高は、古墳群南側の国立療養所内に存在する一等水準点5569（標高12.4934m）を利用し、そこからT8に移動した。往復での誤差は0.6cmに収まっているため、誤差配分を行い、標高を算出した。基準点の測量成果は、表1の通りである。

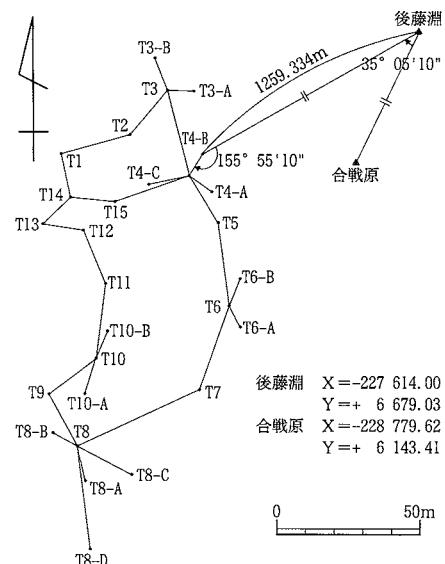
(2) 古墳の呼称

各墳の呼称については、1956年に志間泰治氏が報告した際に付されたものがあるが、のちに山元町教育委員会によって別の番号が付され、各墳の墳頂に表示板が設置されている。ここでは後者の呼称にしたがつた。

(3) 測量の範囲

測量を始めた当初はそれぞれの古墳を中心とした部分のみを部分的に測量する予定であったが、古墳群内の立ち木が伐採されたことを契機に、古墳のみではなく周辺の地形を含めた古墳群の全域を測量することとした。

また本古墳群内には、斜面と直交する方向に



第3図 測量杭配置図

表1 合戦原古墳群基準点測量成果表

基 準 点	局 地 座 標		国 土 座 標		標 高
	X 座 標	Y 座 標	X 座 標	Y 座 標	
T 1	+ 18.405	- 41.491	-228 248.179	+ 5 541.738	34.126
T 2	+ 18.882	- 16.654	-228 241.532	+ 5 565.676	28.188
T 3	+ 30.687	± 0.000	-228 225.954	+ 5 578.868	27.311
T 4	± 0.000	± 0.000	-228 255.676	+ 5 586.502	28.862
T 5	- 18.276	+ 5.611	-228 271.980	+ 5 596.486	22.142
T 6	- 47.022	+ 2.363	-228 300.630	+ 5 600.497	22.457
T 7	- 72.726	- 25.057	-228 332.350	+ 5 580.339	20.573
T 8	- 81.011	- 61.179	-228 349.367	+ 5 547.416	26.102
T 9	- 61.249	- 66.195	-228 331.477	+ 5 537.640	27.928
T 10	- 53.231	- 47.116	-228 318.961	+ 5 554.122	25.860
T 11	- 29.141	- 37.675	-228 293.279	+ 5 557.268	26.871
T 12	- 9.372	- 40.342	-228 274.797	+ 5 549.763	32.991
T 13	- 3.639	- 53.571	-228 272.538	+ 5 535.523	34.959
T 14	+ 3.196	- 42.161	-228 263.077	+ 5 544.873	37.063
T 15	- 2.412	- 27.350	-228 264.821	+ 5 560.614	32.980
T 3 - A	+ 28.031	+ 8.796	-228 226.337	+ 5 588.048	22.941
T 3 - B	+ 42.644	- 1.402	-228 214.723	+ 5 574.533	23.883
T 4 - A	- 7.550	+ 6.204	-228 261.444	+ 5 594.390	25.277
T 4 - B	+ 6.186	+ 6.208	-228 248.139	+ 5 590.974	25.818
T 4 - C	+ 0.447	- 14.641	-228 258.888	+ 5 572.210	29.536
T 6 - A	- 55.182	+ 4.160	-228 308.086	+ 5 604.269	19.892
T 6 - B	- 38.972	+ 8.159	-228 291.391	+ 5 604.106	19.663
T 8 - A	- 93.360	- 61.277	-228 361.351	+ 5 550.396	23.662
T 8 - B	- 74.576	- 68.012	-228 344.836	+ 5 539.196	24.020
T 8 - C	- 95.195	- 45.060	-228 359.091	+ 5 566.559	—
T 8 - D	-116.674	- 65.389	-228 384.956	+ 5 552.217	—
T 10 - A	- 64.115	- 54.042	-228 331.227	+ 5 550.124	23.422
T 10 - B	- 44.889	- 40.945	-228 309.345	+ 5 558.022	23.024

伸びる浅い溝状のくぼみが数カ所認められ、付近に鉄滓の散布が認められた。本古墳群の近傍には、合戦原遺跡の須恵器窯跡や北名生東須恵器窯跡などをはじめ多くの窯跡が存在することを考えるとこれらは窯跡の可能性があり、古墳と同様に測量の対象とした。

4. 調査成果

(1) 古墳の分布

本古墳群の位置する亘理丘陵の東端部分は、数本の狭小な尾根にさらにわかれている。本古墳群の位置する部分は、5号墳の位置する地点を頂部として北東方向・東方向・南方向に伸びる都合5本の尾根があり、8基の古墳はいずれもこの尾根を加工して築造されている。詳細にみれば、もっとも北に位置する北東方向に伸びる尾根上に8号墳、おおよそ東方向に伸びる3本の尾根上には北からそれぞれ6号墳と7号墳、4号墳、3号墳、南方向に伸びる尾根には1号墳と2号墳が位置する。

なお1963年の国道6号線の改修工事に伴って調査された古墳は8号墳の位置する尾根上のさらに北東側に位置していたものと思われ、これらを含めると本古墳群は10基の古墳からなっていたことになる。

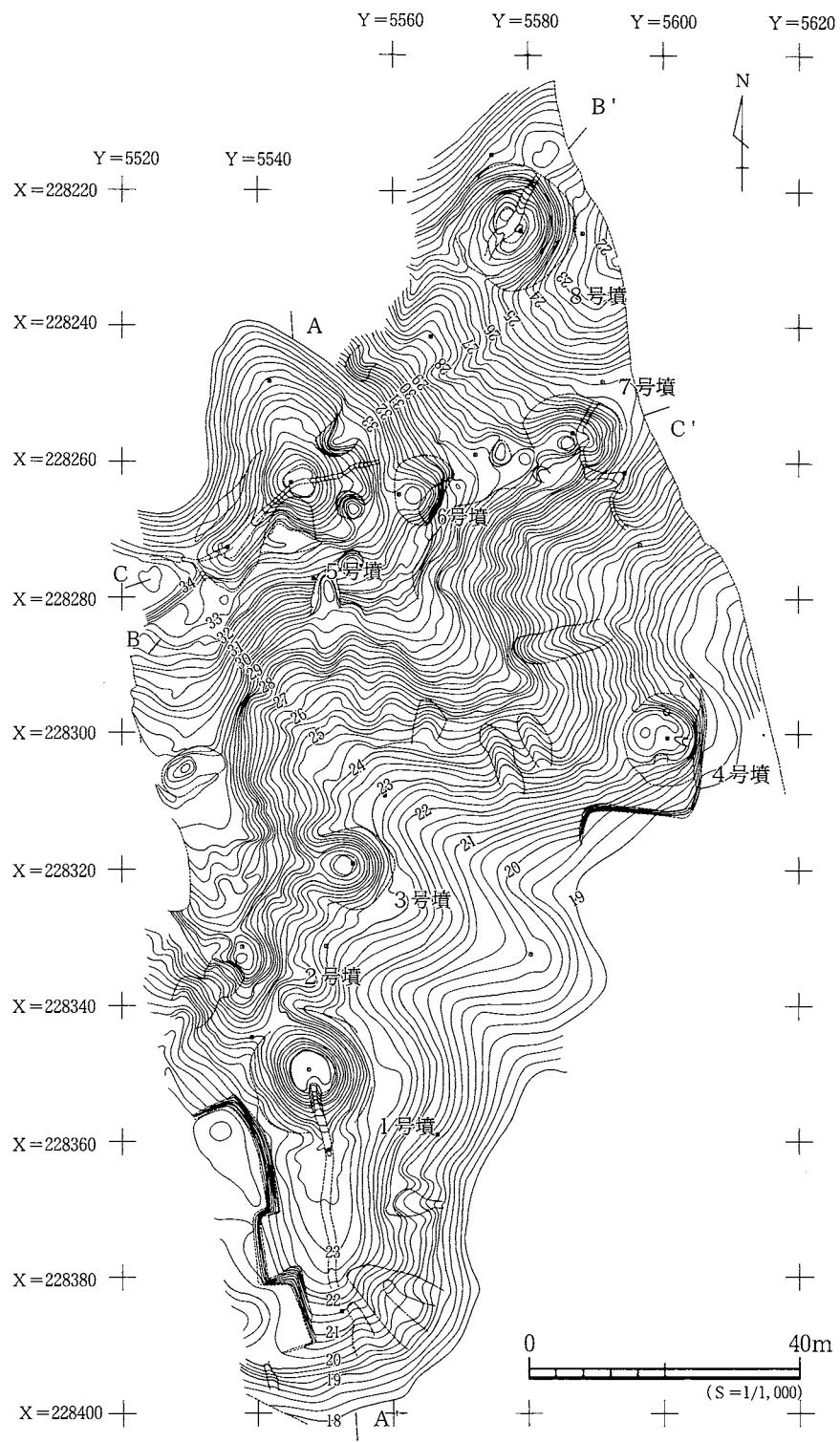
本古墳群の中における古墳の平面分布にはややかたよりがある。南半の1・2・3号墳をもって一群を認めることができ、北半には5・6・7・8号墳からなる一群がある。4号墳のみはこの両者からやや離れて位置している。

なお、1963年の国道6号線の改修工事に伴って調査された4基の円墳(志間 1965・1968)のうち、直径14m・高さ3mの「1号墳」と直径12m・高さ2.5mの「2号墳」は工事などによって失われている。「4号墳」は今回の測量調査で8号墳としたものと同一であることから、直径4m・高さ0.3mの若干の高まりを持つ「3号墳」も含めてその位置を推定・復元すると(註2)、8号墳はむしろすでに消滅した「1号墳」・「2号墳」と一群をなしていないものとも考えられる(図2)。

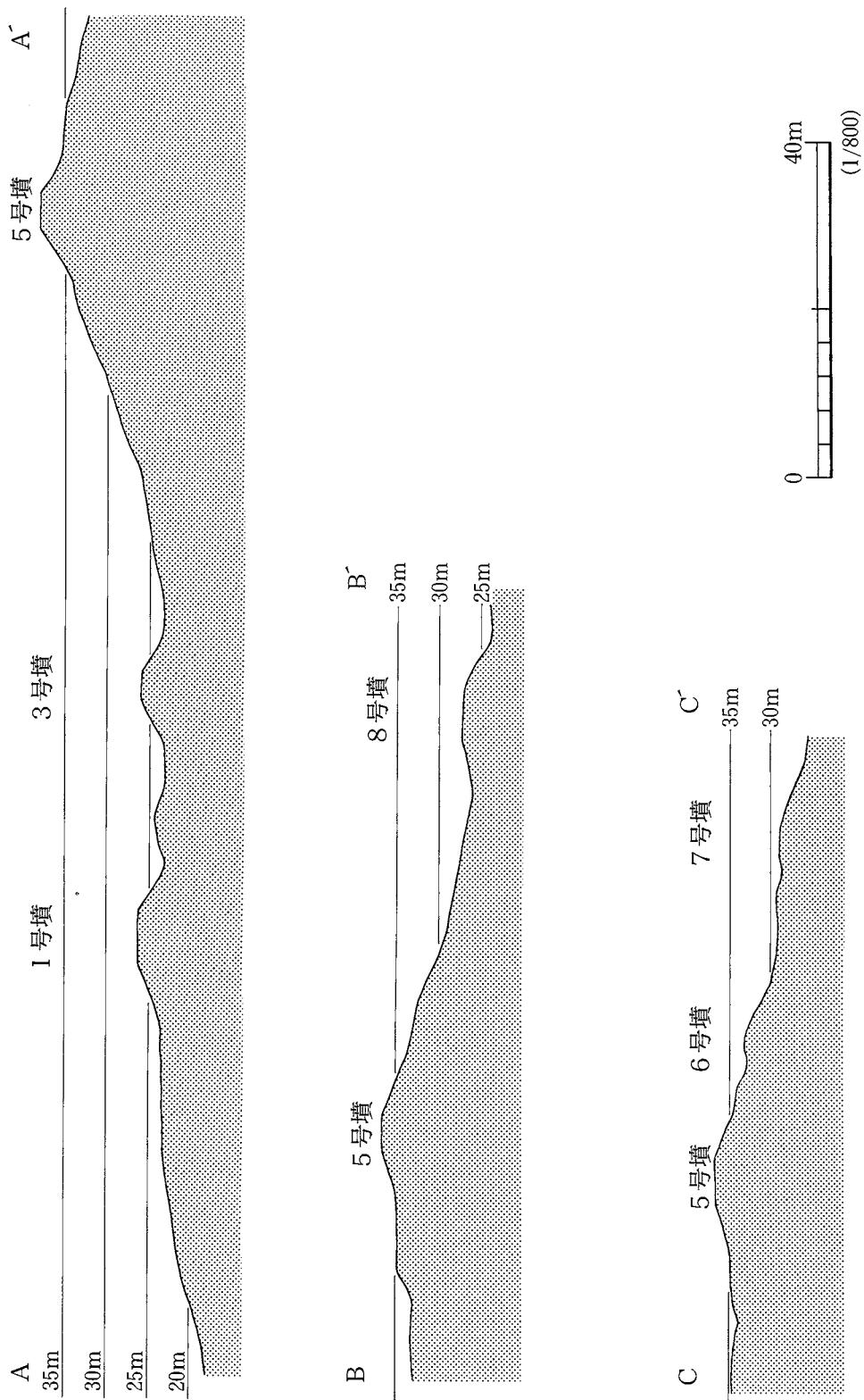
また、本古墳群からは離れているが、北東へ約300mの丘陵が平野部と接する縁辺部に直径10m・高さ2mほどの円墳1基があるほか(註3)、北西へ約400mの丘陵西斜面に直径10数mの円墳2基があったことが確認されており(註4)、古墳群としての範囲はさらに広範囲に及んでいたか、もしくは別の支群が形成されていたものと思われる。

(2) 古墳各説

古墳群は、東を国道6号線の建設によって失われているが、1号墳の南西部と4号墳の東側と南側に認められる一部造成された個所を除き、ほぼ旧地形を留めている。ただし、戦時中、本土決戦に備えて陸軍が掘ったという機銃陣地跡と思われる攪乱坑が5号墳周辺



第4図 合戦原古墳群測量図



第5図 合戦原古墳群工レベーション図

と7号墳にみられ、特に5号墳は墳形の復元に大きな障害となっている。

以下、各古墳毎に見て行くこととする。

1号墳（図6） 本古墳群の南端に位置する円墳である。南に伸びる尾根上、標高23～26mに立地している。本古墳の西側は大きな攪乱を受けているが、地表で観察される墳裾には及んでいない。墳丘は踏み分け道によって南側上半が浅く溝状にくぼんでいるものの、ほぼ築造時の状態をとどめているものと思われる。この道の下半はスロープ状に突出しているが、これが築造当初からのものかは不明である。

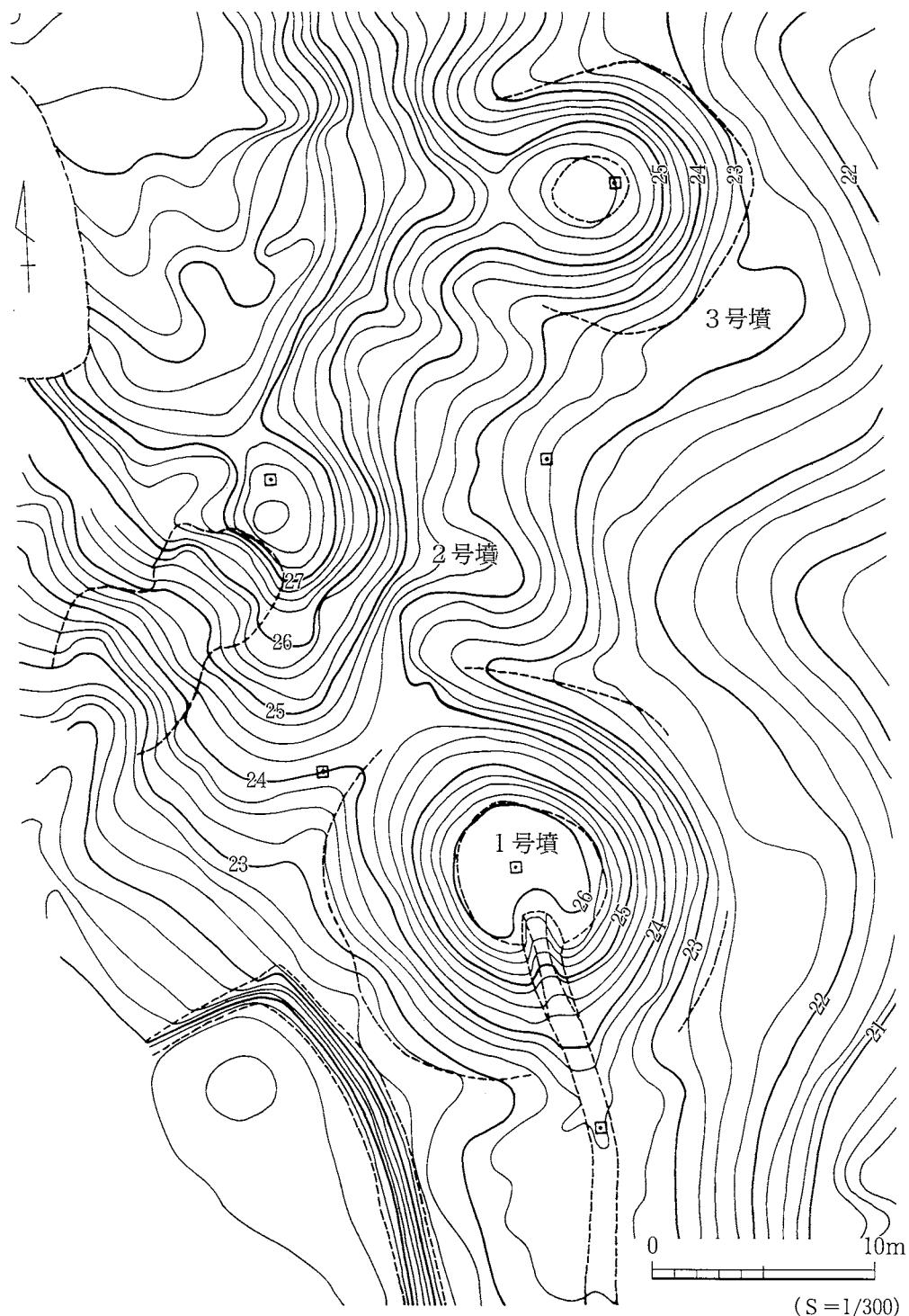
墳丘の平面形はほぼ円形で、墳裾、墳頂平坦面ともに比較的明瞭である。墳丘の直径は約17m、高さ約3m、墳頂平坦面の径7m前後を測り、本古墳群の円墳では8号墳と並んでもっとも大きなものである。墳丘の南北には尾根を切断する溝が認められる。南側の溝はくぼんでいることが観察される程度の浅いもので、スロープによって東西に分かれている。北側の溝は尾根を深く掘りこんでいるが、北西部分が完全に切り離されておらず陸橋状となっている。墳丘の東側と南側には比較的広い平坦面が認められる。

2号墳（図6） 本古墳群の南部に位置する円墳である。南に伸びる尾根上、標高25～27mに立地している。墳丘の南西側に土砂崩れ状の攪乱をうけている。墳丘の平面形はややいびつな円形を呈しており、墳端線、墳頂平坦面ともに不明瞭である。直径はおよそ9～10mほど、高さは2mほどである。墳丘の北側は尾根を断ち切る溝が認められるが、北西方向は完全に切り離されていない。

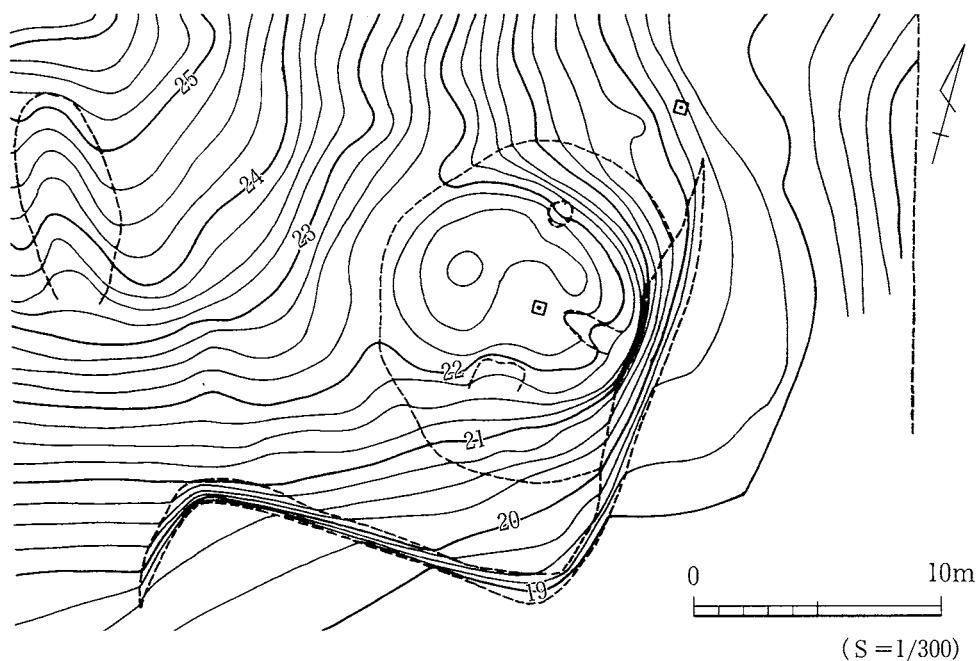
3号墳（図6） 本古墳群の南部に位置する円墳である。おおむね東に伸びる尾根上、標高23～26m付近に位置する。墳丘の西側は尾根から完全に切り離されておらず、平面形は東西にやや長い楕円形を呈している。直径約12m、高さ約3mである。墳丘の南北に尾根を断ち切る溝が認められるが、それほど顕著ではない。墳端は比較的明瞭である。

4号墳（図7） 本古墳群の東端に位置する円墳である。東に伸びる尾根上、標高20～22m付近に位置する。墳丘の平面形はおおむね円形を呈するものの、墳端・墳頂平坦面とも不明瞭である。墳丘の東側は大きく削られている。墳丘と尾根の境は不明瞭で、両者をへだてる溝が浅く掘りくぼめられている程度である。

5号墳（図8） 古墳群が分布する丘陵最上部に位置し、標高33～37mに築かれた前方後円墳である。西から伸びる丘陵の尾根の東端に立地しており、主軸方向は尾根の方向に沿って北から東へ45°振れている。攪乱坑により後円部3分の2と南側括れ部の原形は失われているが、前方部と北側くびれ部、後円部の北西側はほぼ原形を留めており、これらから推定復元すると、全長28m、後円部は直径16m・高さ3m・頂径4.5m、前方部は長さ13m・高さ1.5m・前端部幅9.5m・括れ部幅7.5mである。後円部には段築は認められず、



第6図 1・2・3号墳



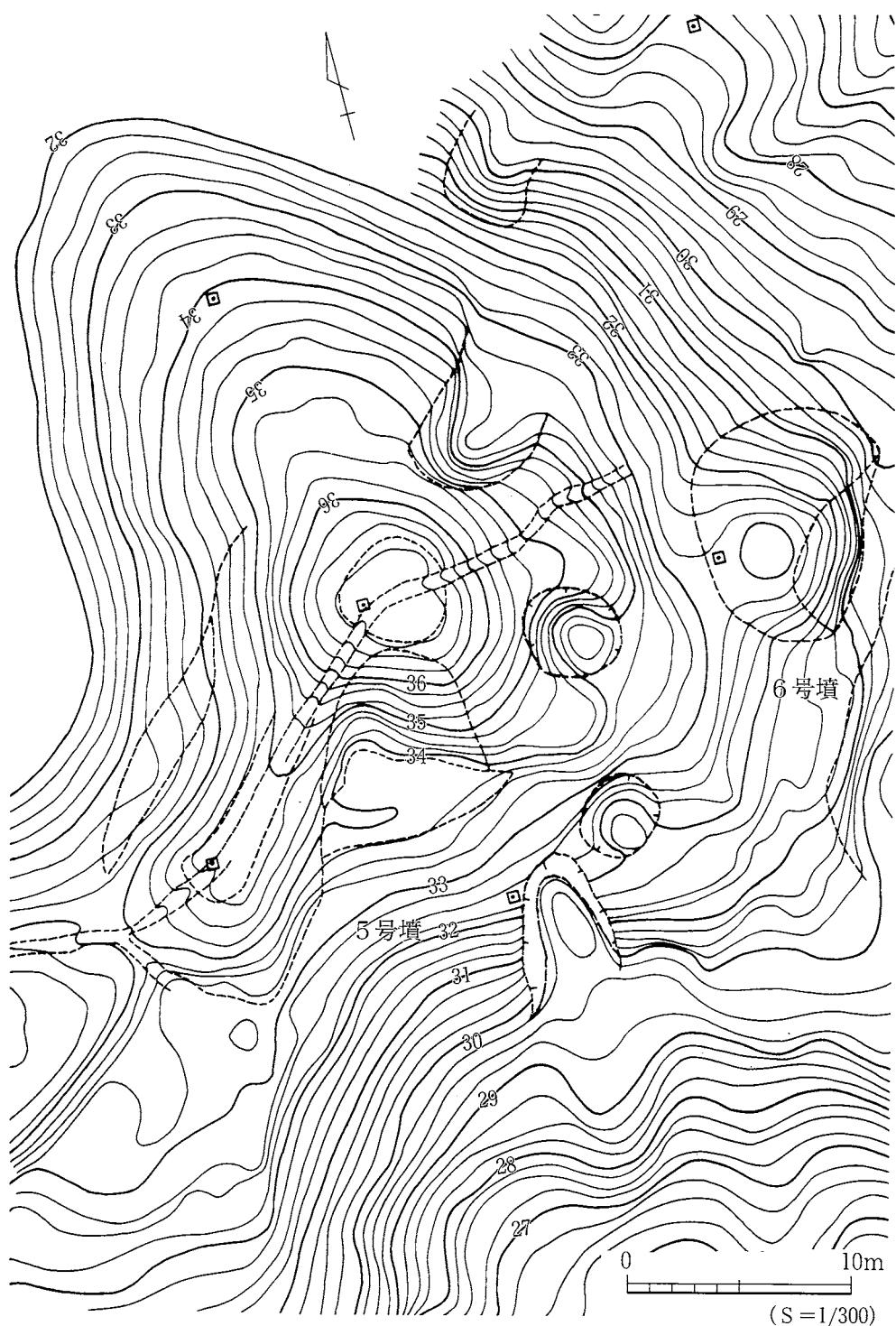
第7図 4号墳

埴輪や葺き石といった施設も認められない。北側斜面の傾斜は緩やかに尾根の自然地形の傾斜と連続しており、明瞭な墳端は確認できなかった。前方部は前端部で自然地形からの切り離しがなされているが、他の古墳と同様に切り離しが弱く、墳端を画する程度にとどまっている。前方部は開きが弱く、比較的細長い特徴を有し、後円部との比高差が大きい。前方部端の形態は僅かに弧を描いている。

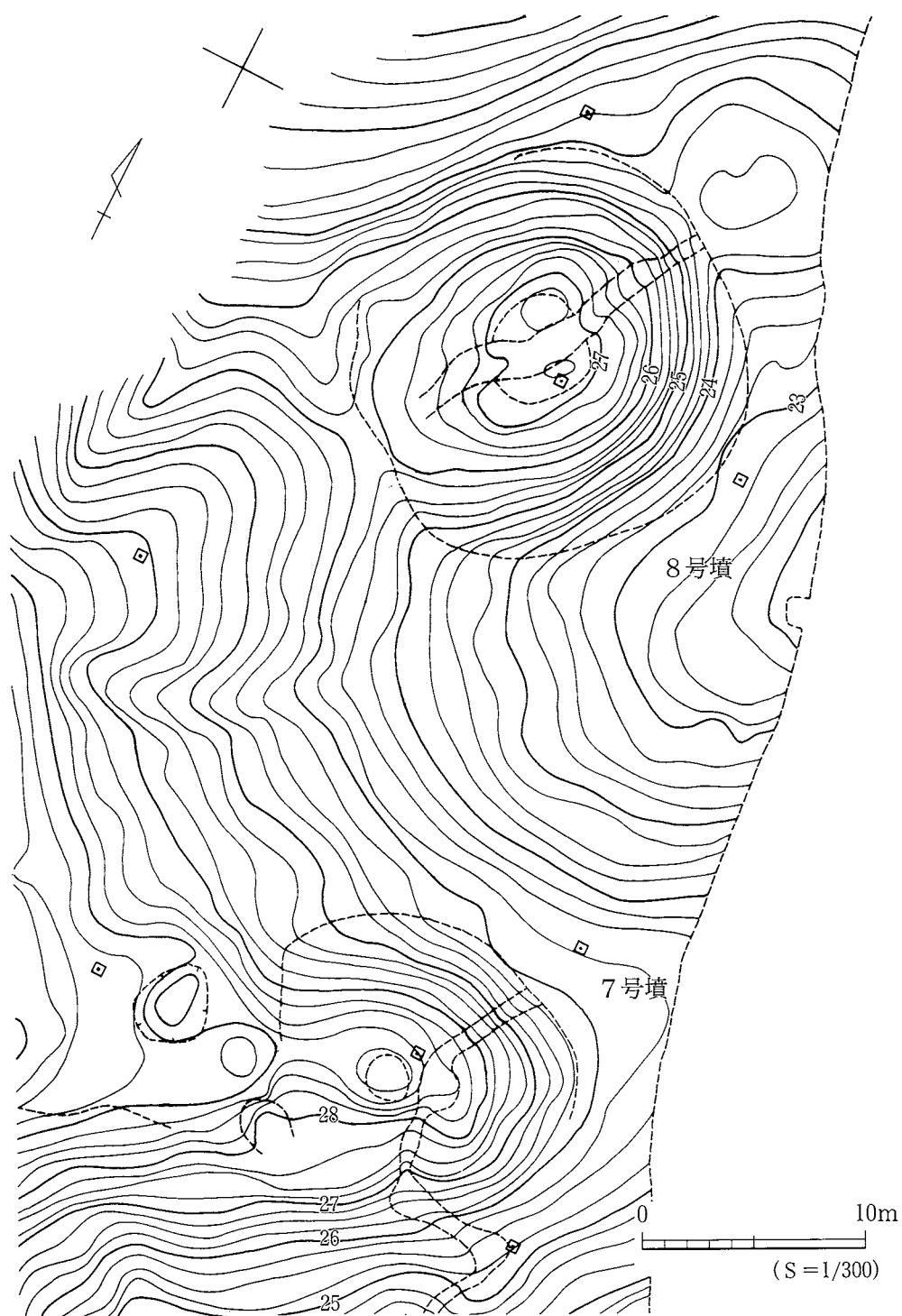
6号墳（図8） 5号墳の東に近接し、標高31～33mに築かれた円墳である。南東側を大きく削られており、墳頂平坦面は失われているが、直径10m、高さ2mの規模と考えられる。5号墳を頂点とする西から東へと緩やかに下る小さな尾根上あり、周囲を削った土を盛り上げて墳丘を構築しているが、他の古墳と同様に西側の切り離しが弱いため、東側に比べて高低差は著しく少なくなっている。

7号墳（図9） 6号墳の東に位置し、標高26～29mに築かれた円墳である。南側を搅乱坑により壊されているが、直径16m、高さ3m、墳頂平坦面の径は2mである。6号墳と同一の小さな尾根上にあり、同様に西側の切り離しが弱い特徴を持つ。6号墳との間に微妙な高まりを有する部分が見られ、古墳の可能性がある。

8号墳（図9） 5号墳の北西、7号墳の北に位置し、標高23～27.5mに築かれた円墳である。築造当時の状況をよく留めており、直径18m、高さ4m、墳頂平坦面の径は5m



第8図 5・6号墳



第9図 7・8号墳

である。5号墳を頂点として北東に伸びる小さな尾根上状を呈する部分に立地し、5号墳から約40m離れたところにある。西側の切り離しが弱い点は他と同様である。北東側に微かな高まりが見られるが、1963年の調査で検出された3号墳と同様の遺構である可能性がある。

(3) 志間氏の発掘調査による所見

「合戦原古墳群調査概報」(志間 1965)によると、すでに消滅している「1号墳」・「2号墳」については南北に、本報告で8号墳とした「4号墳」については東西と南北にトレントを入れ、地山面まで掘り下げて調査が行われたが、内部施設は確認されていない。「1号墳」の封土から土師器の細片が若干出土したとされる。

「3号墳」では約50cmの深さのところで凝灰岩の小ブロックが東西2m・南北1mほどの範囲で確認され、一部に朱と思われる付着物が見られたが、明確な遺構は検出されなかつた。遺物として、凝灰岩ブロックの上面と中から径1cmほどの緑色ガラス小玉3点を含むガラス小玉10数点が出土している(志間 前掲書)。前述のとおり「3号墳」と同様のわずかな高まりは何ヶ所か認められ、古墳以外の埋葬施設の存在が想定される。

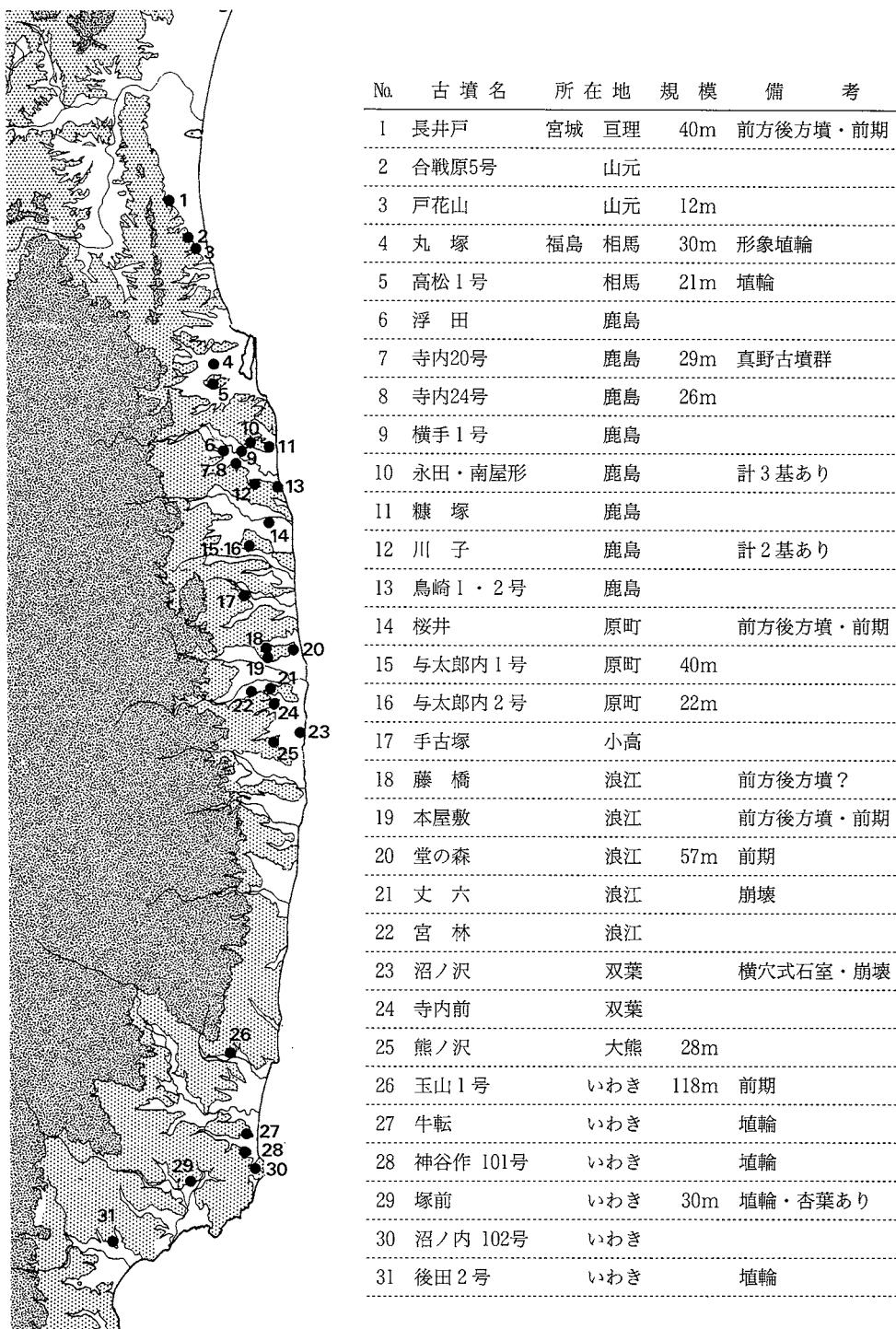
5. まとめ

合戦原古墳群は、現状で全長28mの前方後円墳1基と直径10数mの円墳7基からなり、国道6号線の改修工事によって消滅した2基の円墳を含めると合計10基以上からなる古墳群であったことが知られる。

本古墳群の築造時期を知る手がかりは、前方後円墳と円墳からなる群構成、志間氏の発掘調査による所見、そして今回の墳丘の測量図のみで、材料が豊富とはいえない。丘陵最高所に位置する前方後円墳の5号墳を本古墳群造営の端緒とすれば、その墳形が手がかりの一つとなる。5号墳の特徴は、前方部が細長く低平なことで、後期の所産であるとは考えにくい。また墳丘の損傷するその他の古墳の断面観察からは、横穴式石室を内部主体とするものは認められない。

志間氏の調査の際に8号墳にトレントを入れたが埋葬施設は検出されず、そのほか「3号墳」からガラス小玉10数点が出土したとされるが、これが竪穴系の埋葬施設とすると、必ずしも長大なものとはいえない。またいずれの古墳も墳頂平坦面が小さく大形の埋葬施設の存在は考えにくい。

本古墳群の特徴としていま一つ、尾根と墳丘が完全に切断されず陸橋状につながっていることがあげられる。このような墳形は前期には少なく、中期初頭より以降に散見されるようになる(註5)。



第10図 宮城県南部沿岸～福島県浜通り地方における前方後円（方）墳の分布

これらを考えあわせると、本古墳群の造営はおおよそ古墳時代中期から後期の初めまでの時間幅の中で考えることができる。ただし造営の契機となったと考えられる前方後円墳の5号墳については、さかのぼって前期に築造された可能性も残る。

今回の測量調査は、小規模ながらも1つの古墳群の全域を測量することができた。その労力は決して小さなものではなく、2カ年にわたって5月の連休に現地に足を運んで測量に参加してくださった皆様に御礼申し上げる次第です。

註

- 1) 調査は有志が参加して行ったが、見学の際に手伝ってくださつて方も多い。そもそも、参加者と協力者とを区別していなかったため、以下に調査に参加・協力していただいた方々をまとめて記すこととする。

調査参加・協力者

青山博樹・吾妻俊典・荒 淑人・岩見和泰・大谷 基・大本麻美・荻原研一・織茂麻木子・小村田達也・斎藤美穂・佐々木由樹・鈴木(高橋)朋子・添田武士・高橋 哲・田原由男・西村 力・氷見淳哉・藤沢 敦・古川一明・朴沢志津江・益子 剛・松浦 智・松沢香里・松本和子・矢作征人

なお測量機材などについては、宮城県教育庁文化財保護課と東北学院大学考古学ゼミナールなどの協力をえた。また調査と本報告作成にあたっては、志間泰治氏、渡辺常吉氏のご助言を賜り、土地所有者との折衝などで、山元町教育委員会に多くのご援助をいただいた。合わせて、深く感謝する次第である。

- 2) これらの古墳の位置関係については、調査を担当した志間泰治氏にご教示を賜った。
- 3) 山元町文化財保護委員であった渡辺常吉氏のご教示による。
- 4) 渡辺常吉氏と志間泰治氏のご教示による。
- 5) たとえば千葉県上赤塚1号墳(栗田ほか 1982)、同祝崎2号墳(小沢 1984)、同南谷1号墳(光江 1986)、埼玉県前山1号墳(小久保 1978)、新潟県保内三王山古墳群(甘粕ほか1989)など。

【引用・参考文献】

- 甘粕 健 1989 『保内三王山古墳群測量・発掘調査報告書』三条市教育委員会
 小沢 洋 1984 『祝崎古墳群／戸崎城山遺跡発掘調査報告書』(財)君津都市文化財センター
 栗田則久ほか 1982 『千葉東南部ニュータウン』13—上赤塚1号墳・狐塚古墳群―(財)千葉県文化財センター
 小久保徹 1978 「IV 前山2号墳の発掘調査」『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告』II 埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集 埼玉県教育委員会
 鍛治一郎 1971 「合戦原古窯址群」『山本町誌』山本町誌編纂委員会pp724~747
 近藤義郎編 1991~1994 『前方後円墳集成』山川出版社
 佐久 久・志間康治・氏家和典 1971 「井戸沢横穴古墳群発掘調査報告書」『山本町誌』山本町誌編纂委員会pp707~723
 佐藤宏一 1968 「宮城県亘理郡高瀬合戦原横穴」『日本考古学年報』16 日本考古学協会p124
 志間泰治 1956 「宮城県亘理郡における考古学上の遺跡」『宮城県の地理と歴史』地域社会研究会pp209

18 宮城県山元町合戦原古墳群の測量調査

～216

1965 「合戦原古墳群調査概報」『宮城県緊急発掘調査概報』宮城県文化財調査報告書pp35～37

1968 「宮城県亘理郡山元町合戦原古墳群」『日本考古学年報』16 日本考古学協会p125

1975 『亘理の古墳』 亘理町

辻 秀人・藤沢 敦 1994 「第1章 陸奥」『前方後円墳集成』東北・関東編 山川出版社 pp35～45

中川久夫他 1984 『土地分類基本調査 「塩釜」「岩沼』』宮城県

中川久夫他 1986 『土地分類基本調査 角田』宮城県

光江 章 1986 『上総線鉄塔建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)君津郡市文化財センター発掘調査報告書第19集 (財)君津郡市文化財センター

藤沢 敦 1995 「陸奥 古墳北限の地」『朝日百科日本の歴史別冊』14号 朝日新聞社pp69～72